

悲運の勝野太郎左衛門良政

高針牧野ヶ池の大恩人として、勝野太郎左衛門良政（かつのたろうざえもんよしまさ）を取り上げないわけにはいかないでしょう。家は清和源氏の末裔で、名門の武家です。良政の先々代重政（当時は安食くあんじきく姓）は春日井郡山田庄勝川に住んでいて、永祿三年（一五九〇年）五月の桶狭間の戦いで織田信長に属し、大將首をとったという記録があります。また重政は徳川家康と豊臣秀吉が争った小牧・長久手の戦いで、篠木・柏井（現・春日井市）の郷士と、徳川家康に味方し敵の動静を家康に申し上げて重用され、この時、勝野ヶ原の地名をとって姓を「勝野」とあらためたといわれています。

また、先代の吉政は、尾張藩初代の義直に仕え、伝馬奉行をつとめていました。家康が尾張藩内を通行するとき、人馬不足のため、人足と馬の駅として愛知郡平針村（現・天白区平針）に新しい宿場をつくりました。

さて、良政は、元和六年（一六二〇年）に十八才で、父の跡目を相続しました。そして、寛永二年（一六五〇年）に郡奉行に、寛永十年（一六三七年）には、大代官に出世しました。大代官は、村長と警察署長を両方兼ねる絶大な権力を持つ役職でした。大代官の視察の際、高針村の困窮を見かねて、牧野ヶ池

をつくろうとしたのだから、人情に厚く、実行力のある人柄がうかがえます。

牧野ヶ池と牧野ヶ池用水路は、正保三年（一六四六年）に完成しました。その後、慶安三年（一六五〇年）九月に襲った台風で、用水路と高針川が決壊、高針村、植田村（現・天白区植田）に相当な被害を出しました。そのときはすぐに藩主の命で近在の村から約五千名をかりだし、修復されました。この用水路がいかに大切だったという証でしょう。

慶安五年（一六五二年）良政は亡くなりました。享年五十才。病没と言われているますが、切腹して果てたという伝承もあります。良政が亡くなったのは、牧野ヶ池完成の六年後。牧野ヶ池は、藩の金だけでなく、良政の私財も投じてつくられたのですが、高針村だけのために莫大な費用をかけたことが上司の咎めにあい、申し開きのために切腹して果てたということです。伝承の真偽はわかりませんが、真実だとすれば、良政は悲運の人と呼ばざるを得ません。

良政の墓は、矢場町（中区栄）にありましたが、現在は、墓碑が名東区牧の原三丁目、済松寺西山説教所境内に残るばかりです。しかし、良政の遺徳を後世に伝えるため、大正四年に高針青年会により、「勝野氏頌徳（しようとく）碑」が牧野ヶ池の南側に立てられました。水田のなくなつた今、良政はどんな思い出この碑を見るのでしょうか。